令和5年度　かながわティーチャーズカレッジ
COLLEGE NEWS カレッジニュース
Vol.7

令和5年11月19日 発行
神奈川県立総合教育センター
かながわティーチャーズカレッジ事務局
（教育人材育成課キャリア開発班）

第７回　かながわ教育学講座

令和５年10月29日、第７回かながわ教育学講座が開講されました。第７回教育学講座のテーマは「インクルーシブ教育」です。講義やグループ活動を通じ「インクルーシブ」という考え方について、理解を深めました。

講義「インクルーシブ教育」

講義では、神奈川県におけるインクルーシブ教育の特色や実際の取組について知り、教育のユニバーサルデザイン化について理解を深めました。講義の概要は次のとおりです。

- **インクルーシブ教育は、障がいのあるなしにかかわらず、すべての人が地域で豊かに暮らすことができる「共生社会の実現」を目指している。**
- **神奈川県は「インクルーシブ教育」を推進しており、支援教育の対象は、「各学校に在籍する全ての子どもたち」である。**
- **共生社会の実現に向けて、できるだけすべての子どもが、同じ場で共に学び、共に育つことを目指し、現在、全ての学校においてインクルーシブな学校づくりに取り組んでいる。**
- **全ての子どもに、その子ども一人ひとりのニーズにあった、適切な支援を行うことを「合理的配慮」といい「合理的配慮」を提供するための基礎となる環境整備のことを「基礎的環境整備」という。インクルーシブな学校づくりには「合理的配慮」や「基礎的環境整備」を充実させていくことが重要である。**
- **教育のユニバーサルデザインを考えたとき、「授業のユニバーサルデザイン」「教育環境のユニバーサルデザイン」「人的環境のユニバーサルデザイン」の３つの柱に分けて考えることができる。**

また、演習では「困った子ども」として見るのではなく「困っている子ども」として捉える、「子どもを変える」という視点ではなく「環境を整える」という視点で支援を考えていくことを行いました。

グループ活動

グループ活動では、仮想の事例を通して、インクルーシブ教育を実践的に考えました。グループに分かれて、「子どもが困っていること」や、それに対してどのような支援の手立てが考えられるかを話し合いました。また、その手立てが、「他の子どもに対しても有効かどうか」を考え、どのように工夫したらどの子どもに対しても有効になるかを話し合うことで、教育のユニバーサルデザイン化について迫りました。最後に、各グループで話し合った「子どもが困っていること」と「支援の手立て」を発表しました。

受講者のワークシートより

《オープンコース小学校》

今日はインクルーシブ教育についてだった。気づきが多い講座であったが一番印象に残ったのが、「困った子ども」ととらえるのではなくて、実は「その子が困っている」という発想をもって接するという事である。その視点に立てば、教員がすべき対応は根本から変わる。その上でグループワークを行ったが、グループ担当の先生の指摘が非常に印象に残った。「必ずしも問題がある子どもは家庭に問題がある、授業中寝ている子どもは授業がわからない、というわけではない。」自分自身も先入観をもって考えていたことがわかった。もっと幅広い見地で子ども、そして、置かれた状況を見極める能力が必要だと感じた。

《チャレンジコース小学校》

今日の講座では、インクルーシブ教育は障がいの有無にかかわらずすべての子どもたちが対象であると学んだ。子どもはだれ一人同じではなくて、一人ひとりニーズがあるから、一人ひとりに合った支援を考えていくことが大切だと感じた。グループ協議では、子どもの困っていることは繋がりがあるのではないかと考え、表面的ではない困っていることに目を向けて支援をすることが大切だと考えた。これから「困っている子ども」としての子どもの姿として関わっていけるように、ボランティアの際には心掛けていこうと思った。

《チャレンジコース特別支援学校》

今まで、私は、インクルーシブ教育に関して、「私は特別支援学校だから関係ない」「小学校が頑張ること」と考えてしまっていた。しかし、今回のグループワークを通して、事例の児童に対して考えた支援の多くが、多くの児童にとって有効なユニバーサルデザインであることに気付いた。私が、誰が、ではなく、もう当たり前に、「全員が共に学習し生活し、生きていくために支え合う意識」を身に付けることが大切だと感じた。そのために私は、それぞれの生きやすさについて考え、それが「どうユニバーサルになっていけるか」という視点を持って、分かりやすい授業、共に生活しやすい環境を作っていけるように、バリアフリーではない新たな捉え方を意識したい。教師や誰かが、支援してあげるではなく、全員が全員に一人ひとりの障がいや困難さについて考えて、支え合い、生活していくことが共生社会であり、インクルーシブ教育の中で身に付けるべき力だと感じた。

今回、支援の手立てについて、順序立てて行うことが困難な児童、生徒に対し、「流れを視覚化し構造化して見通しがもてるようにする」など、多くのことを考えた。すべての児童、生徒に対しても有効的な手立てばかりであることに気がついた。私一人で支援の手立てを考えるのではなく、他の先生方と連携しながら、すべての児童、生徒にとって過ごしやすい環境を築いていきたい。

《チャレンジコース中学校英語又は高等学校英語/中学校国語又は高等学校国語》

インクルーシブ教育について学んだ。インクルーシブ教育は「一人ひとりの多様な在り方や自分らしさが尊重される。誰一人排除されない包摂的な教育である。」ということである。障がいの有無に関わらず一緒に学ぶ共生社会の実現を目指しているインクルーシブな学校づくり、合理的配慮、教育のユニバーサルデザイン等、各学級に在籍する全ての子どもたちに必要な支援を行う。私はスクールライフサポーターで中学校の別室登校の生徒たちと関わっているので、今日の学びを踏まえ、声かけやユニバーサルデザインの考え方で一人ひとりと接して、その生徒たちがその時間に価値を見出してもらえるように頑張りたいと思う。